

第1回 クズ

薬学事務課 嘱託技術員 鈴木 達彦

秋の七草の一つに数えられるクズはマメ科の大型のつる性植物である。山野に普通に自生し、都内でも電車の窓から眺めていると、線路わきに繁茂しているのをよく見かける。生長は旺盛で、長く伸びた茎は10m以上に及ぶこともあり、時には他の木をびっしりと覆って日光を遮り、弱らせてしまうこともある。

身近な植物であるクズは、根の部分を食用あるいは薬用とする。風邪を引いて熱が出たとき「くず湯」を飲む習慣があるが、これは、クズのデンプンである葛粉くずこを利用したものである。クズの根にはデンプンのほか、イソフラボン誘導体などが含まれ、解熱や筋肉の緊張を和らげる働きがあり、くず湯の昔ながらの使い方は理にかなっている。しかし、葛粉を採ろうと、クズの根を掘り上げるのは大変で、それから晒してデンプンを採るのも手間がかかる。このためか「葛粉」、「くず湯」として売られていても、クズではなくジャガイモやトウモロコシのデンプンを使ったものが多いので注意が必要である。

これからの季節、「風の引きはじめに葛根湯」といったフレーズを耳にすることも増えるのではないだろうか。葛根湯はクズの根を乾燥させた、葛根を主薬とした漢方処方である。葛根湯は発熱や寒気があり、汗が出ずに肩がこるような症状を目標とする。その他下痢等の胃腸症状にも適応する。あまり体力が弱っていたり、循環器疾患を持つ人には用いられない。実はこの葛根湯、もちろん中国でも重要な処方ではあるが、特に我が国におい



クズの花

蝶形花の花は甘い香りを漂わせる。乾燥させたものを葛花といい、めまいや二日酔いに用いる。

て頻用されてきた処方である。

漢方薬は、患者の症状を「証」としてとらえて処方を決定するという特徴を持っている。「証」には患者の性質や細かい自覚症状も反映されるので、結果として体質にあった処方が選択される。そこで、葛根湯の目標となる「肩こり」であるが、日本人は疲労時や体調の良くないときに、これに苦しむことがよくある。精神的に疲れることも「肩がこる」と表現する。しかし、意外なことに他人種はもとより中国人などのアジア人の間でも肩こりを感じることは少ないようである。肩こりに苦しむ日本人には葛根湯は体にあつた処方といえるかもしれない。

日本人だけが感じる、というのは理解しづらいかもしれないが、一例をあげれば、ドイツでは頭痛などちょっとした体の変調をきたした時、「kreislauf」（血液循環）に問題があると考える向きがあり、実際に循環器の薬が使われるケースが他の国より多いようである。

葛根湯の肩こりのように、漢方薬の効能にはおよそ病気とは関係がなさそうなものまで書かれているが、ここに注意すると漢方薬を上手に服用することができるであろう。